

内的再構について

堀 井 令以知

親族関係のはっきりしている印欧語では、比較の手続きによる原型の再構が可能であるのに、われわれの日本語では、今日の古代日本語研究ブームにもかかわらず、依然として日本語の系統は不明であり、その解決の見込みは当分は望めそうもない状態である。新説とされ新発見とされる日本語系統論も、仔細に検討するならば欠陥が多い。比較されるべき資料が、言語間の借用関係か親族関係かの区別がつきにくいままに放置されたり、類型的一致と混同したり、中には対応といわれるものが単なる偶然の一致にすぎないのではないかと疑われるものもないとはいえない。将来、果たして、日本語は朝鮮語と同系であることが証明できるかどうか。アルタイ諸語との関係はどうなるだろうか。マライ・ポリネシア諸語、南アジア諸語、チベット・ビルマ諸語と日本語はどのように結びつくのであろうか。それとも日本語の系統は決定できないといえるかなど、解決への途は未だ険しく且つ遠いといわねばなるまい。

しかし、こうした外異の言語との比較による再構の研究に没頭するに先立って、われわれとしては、どうしてもうちらを固めておかねばならない状況にある。内的再構の必要性に気づかねばならない。日本語内部の音韻、語彙、文法の各分野にわたる言語事実の比較再構の問題が重要である。日本語の構造の原型を定立するためには、内的再構の方法を改めて吟味し検討し直す必要がある。この点、欧米の言語学者から学ぶべきことが多いにはちがいないけれども、むしろ彼らがこちらについて知るべき点も、日本語の内的再構にあたって見出されるはずだと考えられる。

『蝸牛考』をはじめとする柳田国男氏の業績は、日本語の語彙の内的再構のモデルといえるだろう。「虹」についての再構を柳田方式によって検討してみよう。¹⁾『物類称呼』の中には、虹のことを「尾張の土人 鍋づるといふ」とある。何故、当時の尾張でニジといわなくなったかといえ、すでに虹の語源意識が一般に失われてしまっていたと想像される。現在でも、ナベツルは『日本言語地図』²⁾の259図「虹」によれば、能登、佐渡、秋田のほか、熊本、五島にも見出される。「鍋に虹形のつるを付けるようになったのは、鋳物普及の後のこと」³⁾だが、ニジの語源が分らなくなったために、ナベツル、ナベノツルのような新語が流行したのであった。

それでは、虹の語源は何か。虹のような自然現象の語は、『万葉集』に鴛自とあり、『日本霊異記』に霓(ニジ)がみられるが、もちろん、それ以前から存在したものである。この語の再構のためには、虹方言の全国的分布にもとづいて文献との照合も可能である。虹は幸いにも中央文献に、ニジ、ヌジ、ノジとしてあらわれ、全国の方言にもさまざまな語形が見出される。『日本言語地図』の示すところによれば、ヌジ(琉球、千葉、東北)、ヌージ(主として沖縄)、ノジ(青森)、ノージ(琉球諸島)、ノズ(岩手、山形)、ノーズ(岩手)、ノンジ(北海道南部、青森、秋田、山形)、ネジ(岐阜、愛知、新潟)、ニジ(近畿、関東)ニージ(九州に散在)、ミョージ(西日本古形、北陸、山陰、九州北部、四国)、ミュージ(兵庫、広島、高知、長崎)、メージ(能登)、ビョージ、ビュージ(広島、出雲)、リューン、リュージ(九州)、ニシ(九州南部)、ジュージ(九州南部)などの諸形がみられる。これらの比較から、虹の語形と意味を再構すると、ニジはおそらく、池や沼などのヌン、水中の霊物

としての名と、もとは一つではなかったろうかと推定できる。というわけは、ニジが南島では、もと蛇、長虫の一種の名であり、ウナギ、アナゴとも親縁の語であったと推測される。青大将を意味する内地方言のナブサ(夫木抄)が虹の意味でも用いられるところから、同種の命名法であったと思われ、天草でいう虹のガゴジ(元興寺、鬼、化物)と同じく、ニュージやジョージも「おそるべき霊物」の意味であったらしい。⁴⁾ニジは語形と意味の比較から、究極的にヌンと結ぶべき語であったと推論できよう。その語音は、万葉集以前からおそらく多様であったにちがいない。このことは『日本語地図』の分布図からも十分に納得されるところである。

さて、内的再構について、印欧語学者マネシー・ギトン女史の定義は次のようである。「一言語の過去について、直接の史的資料が欠けている場合に、内的再構の手續をすることによって、時に「時間をさかのぼる」ことができる。その方法の原理は簡単である。一言語の歴史の流れで生じる偶然の事件は、時に認知できる痕跡を残すもので、狩人がその臭跡を見抜いて獲物の足跡を見出すように、言語学者は、その原因を見つけたすにちがいない。」⁵⁾こうした内的再構の一つの場合を、彼女はギリシア語について説明している。「髪」の主格形は、ギリシア語では $\theta\rho\iota\acute{\kappa}\eta$ であるが、属格形は $\tau\rho\iota\chi\acute{o}\varsigma$ となっている。この両形の帯気音の th と kh の配置は、一見して異様である。しかし、実際には、この二形はギリシア語の内的再構によって容易に説明することができる。別に、 $\delta\rho\upsilon\lambda\omicron\varsigma$ 「爪の」は $\delta\rho\upsilon\lambda\acute{\epsilon}$ 「爪が」の属格形であるが、主格形の語尾 -s の前で kh は規則的にその帯気性を失ったのである。従って、同様に $\theta\rho\iota\acute{\kappa}\eta$ においても、その帯気性が S の前で消失したとしても驚くにあたらない。一方、ギリシア語では、一語の中に二つの帯気音の存在が許されない。その場合に、第一の帯気音を非常気音にしてしまう。従って、もしもかつての「髪」の属格形が * $\theta\rho\iota\chi\acute{o}\varsigma$ であったとしても $\theta\rho\iota\chi\acute{o}\varsigma$ に置きかわったはずである。この異化現象は、S の前では *kh はすでに帯気音ではなくなっていたものだから、主格形では th については t になることはなかった。このようにして二つの形 $\theta\rho\iota\acute{\kappa}\eta$, $\tau\rho\iota\chi\acute{o}\varsigma$ は、ギリシア語だけの内的再構によって、主格形 * $\theta\rho\iota\acute{\kappa}\eta$, 属格形 * $\theta\rho\iota\chi\acute{o}\varsigma$ を措定することができる。⁶⁾

内的再構にあたって、われわれは文献にあらわれる事実を十分に尊重し、その解釈の成果を再構に役立てねばならない。意味の再構の一例をラテン語についてみよう。ラテン語の *sanguis*, *cruor* は、ともに「血」を意味し、テキストを読む場合、いずれも「血」と訳してすまされているが、詳細にみると、この二語は一流の古典作家にあっては意味の弁別がなされているのに気づく。ルークレティウスの『物の本質について』の中には、次の詩行がみられる。⁷⁾

Quod genus e nostro cum missus corpore sanguis Emicat exultans
alte spargitque cruorem (II 194~195)

「これは、われわれの体から血が出て、高くほとばしり、血しぶきを散らすのと同じ理による」

この場合、体内を循環する血は *sanguis* で、身体の外にあふれ出る血は *cruor* である。このように、テキストの中での証拠が、再構に大いに役立つこともあるから、文献を無視して比較の方法だけに頼るだけでは危険である。なお、*cruor* の方は、派生語として *crūdus* を生じ、血を流す意味から「生の、煮ていない」の意味をとるようになり、今日のフランス語の *crudité* 「食物が生であること」のような形になっているし、「血」の意味では、も

っばら sang の方を用いることになっていった。

語の歴史を再構するにあたっては、内的再構のほかに、外異の諸言語との比較研究ができれば、それは願ってもないことである。この比較による再構を、外的再構と呼んでもよいと思う。フランス語について外的再構を考えてみよう。たとえば、jeu「遊び」という語についてみると、この語は、ラテン語 *jocum* に由来する。ロマン諸語に比接形を求めてみるとプロヴァンス語 *joc*、イタリア語 *giuoco*、ルーマニア語 *joc*、スペイン語 *juego*、ポルトガル語 *jogo* がある。音韻的に /k/, /g/ のような喉音が、フランス語以外のロマン語にみられ、これらがラテン語の *jocum* に遡ることは十分に立証される。さらに、-ocum の語形は *focum* の場合と並行している。すなわち、*focum* から出たプロヴァンス語 *foc*、イタリア語 *fuoco*、ルーマニア語 *foc*、スペイン語 *fuego*、ポルトガル語 *fogo* のように規則的に対応している。フランス語は、この場合も *feu* となっていて、*jeu* と並行する形になってしまった。ラテン語の語頭子音 *i-* がフランス語で *j-* であらわれることも規則的な音韻変化といえる。このことは、*iumentum* が *jument*「牡馬」になり、*iuncum* が *jonc*「燈心草」となるなど立証できる。

語の意味の再構、語源研究の目的とするところは、語の歴史を、起源から継的に跡づけて、語が後代の形態と意味をとるに至ったさまざまな言語事実のつながり、*enchaînement* を求めることでなくてはならない。*etymologia* は、プラトーン時代のように、語の真の意味 *etymon* を、現実の意味のみを求めるのではなく、また単に語が過去においてもっていた意味のみを求めようとするものでもない。継的つながりを求めるところに意義がある。

ところが、再構の上限、遡及の限界については、いろいろと問題がある。上記の例のように、フランス語の語源はロマン諸語の比較にもとづいてなされ、ラテン語の語源ということになれば、それは印欧比較言語学の領域で採りあげられる。しかし、一見この二つの違った領域、印欧語領域での再構とロマン語領域での再構ということは、あくまで便宜的なアプローチの上での制約によるにすぎない。フランス語 *feuille*「葉」の再構の上限は、ラテン語 *folium* で十分かもしれないが、印欧語的には *folium* の語源が、古代アイルランド語の *deuille* と結ぶか、ギリシア語の *φύλλον* と関係づけるかは、語頭の *f-* を *dh-* とするか、*bh-* とするかによって意見が分れる。⁸⁾

ロマン語学者の仕事は、普通は、ケルト諸語、ゲルマン諸語、スラヴ諸語、インド・イラン諸語その他印欧語全般からの再構には及ばないのが通例である。フランス語の *grain* の起源はラテン語の *granum* であるが、これをドイツ語 *Korn*、英語 *corn*、ロシア語 *zerno*、ポーランド語 *ziarno* と比接し、フランス語の *cent* (ラテン語 *centum*) を英語 *hundred*、ドイツ語 *Hundert*、さらに古代ギリシア語 *ἑκατόν*、アヴェスタ語 *satəm*、サンスクリット *ṣatam* と比接することなどは、むしろ印欧比較言語学の領域として、ロマン語学者は避けて通ってきたのである。

しかしながら、フランス語が印欧語の一言語である限り、ラテン系諸語だけの比較にとどまらず、印欧語の全体的見地からの再構を考える必要がある。フランス語の *faire* は、英語の *do* と語源を同じくすることは、印欧語の比接によって説明がつく。ラテン語の *facere* (*facio*) はフランス語の祖形であるが、これをギリシア語の「置く」を意味する動詞 *τίθημι* (アオリスト *ἔθηκα*) と比接することは、印欧比較言語学の教えるところである。印欧語の共通基語としては、**dhē* を定立し再構できるが、この語には「する」と「置く」の二つの意味を認めることになる。この二つの意味の結びつきは、ギリシア語 *βασιλέα*

τινάθειναι を、ラテン語で *aliquem regem facere* 「誰かを王にする(おく)」のように表現できるから、ラテン語では「置く」の意味が薄れて、単に「する」の意味だけを持つに至ったものと解釈できる。⁹⁾

あれほど輝やかな成果を挙げた印欧語の比較文法も、詳細にみるならば、まだ細かい点で疑問が残されている。サンスクリットの *tákṣan* 「職人一大工」、ギリシア語の *τέκτων* の対応から、サンスクリットの *s* が、ギリシア語の *t* であらわれる事実について、メイエなども説明のつかない事例として敬遠したほどである。これは、アヴェスタ語 *taš*, ラテン語 *texō* 「建てる」の系列から、共通印欧語 **tek^s* の指定形を再構することが提案される。この *k^s* については、ギリシア語 *κτάομαι* 「獲得する」、サンスクリット *kṣayati*, アヴェスタ語 *xšayeyiti* の対応から *k^seo₂* が再構できる。*κτίζω* 「建物を立てる」、*kṣeti* 「彼は居住する」の系列についても同様である。

記号素の過去を知ること、語の内的再構のためには、はっきりした文献の証拠によって決定しなければならないのは勿論のことであるが、証拠の欠如を補うのは、いうまでもなく比較の方法にもとづく手順といえよう。また、すべての語の歴史が同じ条件の下で展開されるわけではない。歴史的事実は、本来、独自のものであり、同じようには二度とは起らないものである。従って、現実にそれぞれの語は固有の歴史を持っているといえよう。

まず、語形と語義が継続的に証明できる場合を考えてみる。ラテン語 *oleum* は、ロマン語では *olium* となり、フランス語の *huile*, プロヴァンス語 *oli*, イタリア語 *olio*, ポルトガル語 *oleo* に継承されている。スペイン語では *olio* または *oleo* を持っているが、俗語ではアラビア語起源の *aceite* 「オリーブ油」が使用されている。ラテン語の *oleum* は、オリーブ油のことであった。ところが、フランス語の *huile* は一般に油を示している。機械に塗る油をも意味し、ラテン語の *oleum* より、はるかに広い意味範囲をもっている。ラテン語の *oleum* と *oliva* は、ともにギリシア語起源の語である。ギリシア語の *elai(w)on* 「オリーブ油」と *elai(w)ā* 「オリーブの実」に由来する。このように、フランス語の *huile* は、ギリシア語から継承した形として、その意味を跡づけることができる。¹⁰⁾

ところが、語形と語義が継続的でない場合がある。フランス語 *foie* 「肝臓」も、その一つのケースと思われる。ラテン語で「肝臓」は *iecur* であるが、この語はロマン諸語まで伝承されなかった。Bloch と Wartburg のフランス語語源辞書を見ると、*foie* の語源は、意外にもギリシア語の *sykōton* に遡るとある。*sykōton* は、ロマン諸語のどの形とも直接には対応しない。*sykōton* は《*fourré de figes*》を意味していて、肝臓の名と何らの共通性をもってはいない。この語を肝臓と結びつけるためには、ローマ帝政時代に、いちじくを肝を詰めた料理のあったことを知らなくてはならない。そこで *sykōton* は、肝臓を示す一般的な料理用語となったものである。この語を、ラテン語では、いちじくを意味する *ficus* で置き換えたのであった。古典ラテン語には同じく *fēgato* の形もあった。それが北イタリア方言に残って、ピエモンテ方言に *fidik* がある。イベリア半島では、スペイン語 *hígado*, ポルトガル語 *fígado* となり、東方のルーマニア語では、アクセントは第二音節にあって、*ficát* となっている。いずれも、かつての料理名が肝臓の意味に変わったのである。¹¹⁾

もっと特異な例を挙げてみよう。それは、*lésine* 「吝嗇」の場合である。この語は、イタリア語の *lesina* 「靴屋の使い大針」がフランス語に入ったものである。しかし、イタリ

ア語においては、lesinaは、下品な吝嗇の意味では現在は用いられていない。つまり、この語の意味変化を説明する事実が分らないでは、lésineの今ある意味は把握できないわけである。この語は、イタリアのさる作家が、十六世紀に出版した諷刺物語に由来している。この本の中には、吝嗇のグループがCompagnia della lesina という会社をつくって仲間の子の靴を修繕するために、大針の共同購入をしたということが書いてある。そして、この書がフランス語に訳され、lésineの語が吝嗇を意味することになった。¹²⁾この種の偶然の事情が文献的に証明されない限りは、語の起源は永久に分らなくなるわけであり、再構できないことになる。塵箱を意味するpoubelleも、かつてのセヌス県知事Poubelleの名に由来することは、1884年に彼がパリ市民に塵箱を義務づけた事実からわかるのである。¹³⁾

それぞれの語の背後には、複雑な過去の歴史がひそんでいる。この過去を掘りおこす作業が再構といってよい。「雄鶏」を意味するcoqは、擬音語のcocoricoから来ているが、一般に擬音語が普通語化するの稀なことである。coqは、かつてのラテン語gallusに置きかわった語である。また、「ガス」を意味するgazが、chaosに由来することを知る人も少ないであろう。ガスにたいして、chaosの術語を与えたのは、フラマン人のVan Helmont(1577~1644)であるが、フラマン語のchは有声摩擦音のgに近いために、chaosがgazへと変化したのであった。これも特殊ケースにちがいない。¹⁴⁾

さて、かつて一つのグループを形成していた、いわゆる単語家族のそれぞれの語が、きり離されてしまって、単語家族としての互いに密接な関係を失ってしまうことがある。poids「重さ」と「重さを計る」を意味するpeserの関係のごときも、綴りの上からしても今では関連しにくくなっている。poidsは、かつてpoisであったが、聖職者がラテン語のpondus「重さ」との関係を想像して、poisにdを入れるようになったもので、poisは正しくはpensumに由来している。また、accuser「罪を着せる」とexcuser「弁解する」の関係も今日では結びつきにくい。qui s'excuse s'accuse「弁解するのは告白する」のようなことわざが辛うじてかつての単語家族を結びつけているにすぎない。この二語は、かつてはラテン語のcausaを共通にもつ関係にあった単語家族であった。devoir「義務がある」とdette「借金」とdébitteur「債務者」とdébit「借方」のあいだの関係も今日では分離しすぎているきらいがある。これらのかつての単語家族を再構することも、比較の手続きによって押進める必要がある。

われわれはまた、類義語の再構についても考えておかねばならない。フランス語のvoisinとpaysは、かつては類義語であった。voisinは、もと「町の一区画」を意味したラテン語のuicusに由来している。uicusが「町の一区画」の意味から「通り」の意味になり、uicus Tuscusといえは「エトリュスク通り」のことであった。uicusは「道路」の意味としてイタリア語に入り、vocoおよびその縮小詞vicolo、vicolettoとなっている。派生形のuicinusは、「同じ集団の家の住民」「隣人」の意味を保存し、フランス語のvoisinやスペイン語のvecinoとして残ったものである。¹⁵⁾

「村」の意味では、uicusはその類義語のpagusと争った。pagusの語根は*pāg-で、動詞形のパngo「杭を打ちこむ」は、ギリシア語のπάρυμμαにあたる。pagusはもと「領域を制限するために土地に打込む境界標」のことであった。これが「境界標」から「囲まれ限られた土地」を意味し、さらに「地方」を、また一般には「土地」を意味するようになった。これにたいしてuicusは、村でも「村の中央」を示し、辺境的な意味をも

つ pagus と相対している。

uicus は町の言語に用いられ、都会文明に培われたが、pagus は田園の用語となった。従って、pagus の派生形 paganus は「百姓」を意味するようになった。この系統をひくのがフランス語の paysan である。また pagi は、教会用語として christianus と対比して「異教徒」の意味で用いられている。こうした意味から、ギリシア・ラテン雑種形の paganismus 「異教」が生じたのである。

このような意味のほか、paganus は「市民」を示すのに用いられ、「田舎に駐屯する兵士」をいう castrensis と対比された。フランス語でいうならば、bourgeois にたいする militaire といった関係である。都会では「異教徒」を示すために paganus を保存したときに、この語は軽蔑的な意味を持つようになった。そこで、この語に代る共通語として pagus の住民、市民をあらわす派生形 pagensis ができた。この形は castrensis をもとにして作られたものであるが、現代フランス語の pays, その派生形の paysan として残っている。このように pagus は、ロマン語では派生形として存続したが、原初的な意味から次第に遠ざかる結果となった。

かって町の一区画を意味した uicus は、「通り」の意味しか持たなくなり、その派生形 uicinus も voisin 「隣人」を意味するようになっていった。ただ、uicinus には、「家の集団」ということで、古代の意味の痕跡は保たれた。pagus は消失したが、その派生形はフランス語の païen, pays, paysan に伝承されている。もっとも、このような近代語から原初の形態を指摘し、シノニム関係を再構することは、uicus と pagus の例からしても、まことに困難な事情が理解できよう。¹⁶⁾

さらに、再構にあたっては、偶然の一致に注意を払う必要がある。フランス語の feu「火」は、ドイツ語の Feuer と音も意味も似ているにもかかわらず、別系統の語であり、英語の bad とペルシア語の bad はともに「悪い」を意味し、日本語の二人称代名詞「あんた」とアラビア語の anta が、偶然の一致にすぎないことは、比較言語学上、注意すべき例として引き合いに出されるのである。再構に際しては、同音語に気をつけねばならない。フランス語では、「さいころ」の dé (< datum) と「指抜」の dé (< deel < digitale) は、音も綴りも同じであるが、起源はちがう。民間語源や断定的な語源説の犯すあやまりは、語の歴史をよく考えないことから起ってくるのである。

類義語のほか、再構にあたって、その語が多義語なのか同音語なのかを決定することも、さまざまな困難性がともなり、ここでまずフランス語の「飛ぶ」を意味する voler と、「盗む」を意味する voler の関係を問題としよう。一見したところ、この二つの動詞は、音が似ているにもかかわらず、いろいろの点でちがっている。飛ぶ意味の voler は自動詞であり、盗む意味の voler は他動詞である。この二種の語の共通の語基 vol からは、どのような派生語ができたのであろうか。「飛ぶ」voler からは、voleter 「雛がよちよち飛ぶ」、s'envoler 「鳥が飛び立つ」、survoler 「上空を飛ぶ」、volée 「飛ぶこと」、volatile 「鳥や昆虫が飛ぶ」、volaille 「家禽ことに鶏」、volière 「大鳥籠」のような語を派生語として指摘できるが、「盗む」voler からは voleur が引出される程度である。

このように、「盗む」voler の方は制限的であり、「飛ぶ」voler との結びつきは疑問とされる。ところが、実は「飛ぶ」voler が、他動詞として用いられる鷹匠の詞の中に、この語を「盗む」と結びつける隠れた条件がひそんでいる。《le faucon vole la per-

drix 》 「鷹が飛んでいって、うずらをとらえる」というが、この場合に、例外的に他動詞としての使用がみられ、これが voler の新しい意味をつくったと考えられる。鳥の飛行が、同時に「飛ぶこと」と「盗むこと」に通じることになったわけである。「盗む」意味の voler は、「飛ぶ」 voler の隠喩的使用にすぎず、この隠喩は十六世紀に文証されるのである。現代の共時的言語意識からすれば、voler はすでに多義語というよりは同音語ということになる。¹⁷⁾ それは、「貸す」と「借りる」の二つの louer を同音語と考えるのと同じ意識といえよう。

ここで、いわゆる「意味論的同音語」の一つの場合を考えてみよう。近代フランス語では、pupille 「後見人付き孤児」と pupille 「瞳孔」のあいだには、意味的に何ら関係は認められない。語源的にみれば、この両語も元は一つの語であったのが、分割されたもので、多義語であった。すなわち、古典ラテン語以来、pupilla 「乙女」は、隠喩的にみて「瞳孔」をも示すことができた。これは「瞳孔」に乙女の小さい姿が反映するということから、意味が増えたわけである。二つの語へと分割されたのは、ラテン語時代に完成したが、中世フランス語は二つの離れた語として二つの pupille を借用したものである。まず、法律上の意味「孤児」を、次に、身体器官の名の意味「瞳孔」を借用することになった。¹⁸⁾

現在では分割されている意味のあいだに、かつての関係のあったことを知るのも、再構の方法に頼ることになる。稲光りの éclair と菓子のエクレア éclair のあいだを結びつけるものは、その菓子が一息で食べられることからの命名であることを知れば意味が結びつくであろう。¹⁹⁾

また、三つの grève の関係は、もっと複雑である。言語学者でない一般の話し手にとっては、砂浜の grève、広場の Grève、ストライキの Grève の三つのあいだには何らの関係もないようにみえる。意味の連関を再構することによって、この三つの語は結ばれるのである。すなわち、まず、グレーヴ広場はセーヌ河のほりにあったから砂浜の意味と結びつく。今では、この場所は Hôtel de Ville 「市庁」の広場になっているところである。そして、パリの労働者は、仕事にあぶれたときに、その広場に集った。「労働の停止」を意味するところから、次第にこの語が場所の名と結びつくことになり、ストライキの意味へと転じたのである。²⁰⁾

こうしたケースは、言語使用者の主観的解釈だけではすまされないものである。二つの語 collation は、話し手にとっては、「原本などの照合、校合」の意味と、もう一つの意味「僧院における夕食後の講演の後での軽食」とは互いに結びつかないが、実はこの二つの語は、中世ラテン語の collatio に由来し、元は同音語ではなくて多義語であった。²¹⁾

多義語かそれとも同音語かの区別は、たいへんむずかしい。かつて、筆者は、ギリシア語の $\Psi\upsilon\chi\acute{\alpha}$ について考えたとき、動詞 $\Psi\upsilon\chi\omega$ に、多くの辞書で、「息をする」という意味のほかに、「冷たくする」の意味の記載があるのをふしぎに思い、 $\Psi\upsilon\chi\omega$ に二系の語があったことを指摘した。²²⁾ この語は多義語ではなくて同音語であった。多義語といい同音語というのも、再構の結果、明らかにされることになる。

ブシュケーに触れたついでに、日本語の魂の語について、内的比較、内的再構の必要性を力説しておきたい。筆者が何回となく繰返して愛読している宮廷の公式日記『お湯殿の上の日記』には、よく「とび」という語が記されている。この語は「たましひ」の「たま」と結びつくべき語であった。「とび」は、今日では少なくとも標準日本語からは姿を消してしまった語といえるが、かつては京都中央で用いられた標準語であった。文明十五年三月十四日

の同日記には、「一日のくせまめめす。上らふ。新大。二条殿。御あちゃあちゃよりとびをたぶ」とある。この場合の「とび」は、贈り物の意味であるが、方言には、贈り物および返礼を意味する語として、オタメ、トミ、オトミ、オトメの語が残っており、返礼のことをトビとかカエトビという地方もある。中国地方の各地で、トビといえば返礼の意味であり、九州では贈遺の意味のトビが用いられている。さらにまた、『お湯殿の上の日記』明応六年十一月十九日には、「御かうの宮の御はたきのかちん。御とびまいる」とあり、この「おとび」は、やはり贈り物か返礼の品のことである。地方によっては、オトビは、神詣や年初の訪問に持参する紙に包んだオクマ（洗米）のことをもいう。紙に米やしだを包み、鏡餅の上に乗せるのがトビであり、元旦に米、昆布、銭一枚を白い紙に包んでトビをひねることもあった。こうしたトビが賜びの意味と通じ、年玉のタマ、魂のタマとも単語家族を形成すると推測できる。トビは、古語のトブサヤトマ（苫）と関係があるらしく、うどんの一玉二玉のタマも、人形の方言タマサ、イチマのタマヤチマも個人所有の概念を示すタマシ、タマスと一系の語とみるのが柳田国男説である。『沖縄語辞典』には、タマシは銘々の分、持ち分の意味として記されている。トビが個性の承認、目的物の人格化であり、タマシ、タマスが各人の分け前を意味する以上、靈魂のタマシヒの語源も推論できそうである。従って、タマカゼが悪霊の風を吹きおこすという思想にもとづいて、船頭のおそれる悪い西北の風を意味する地方のあることを柳田国男氏はつとに指摘されたのであった。²³⁾ 京都から西南を丹波、東京の西北に多摩があるのも偶然とは思われない。こうした一連の語系の比較による内的再構によって「とび」の意味は次第に明確になってくると期待してよい。鞍馬代参記事に限って『お湯殿の上の日記』に少なくとも文明年間から天正年間にわたって頻出する「とびがき」の語も、その意味を再構することは現在のところ困難であるけれども、おおよその内容は理解することができる。贈り物を受けたときの返礼の品をいう京都語の「おため」も、「為」「溜め」の意味からでないことも、内的再構によって明らかになるはずである。

注 1) 『定本柳田国男集、第十九巻』所収「虹の語音変化など」 290 べ～300 べ。

2) 『日本語地図』第 6 集、国立国語研究所編、1974、大蔵省印刷局発行、259 図。
「日本語地図解説 6」 26 べ～29 べ。

3) 『定本柳田国男集、第十九巻』 298 べ。

4) 同書 298 べ。

5) Jacqueline Manessy-Guitton: Les familles des langues, Généralités, Le langage, sous la direction d'André Martinet, Encyclopédie de la Pleiade, 1968, p.1228.

6) op. cit., p.1229

7) Lucretius: De rerum natura, II 194～195.

8) 拙稿「交叉語源について」立命館文学 154 号、昭和 33 年 3 月。

9) E. Benveniste: Problèmes sémantiques de la reconstruction, Problèmes de linguistique générale, Gallimard, 1966. p.291～p.292.

10) A. Meillet: Sur l'étymologie du français, Linguistique historique et linguistique générale, Tome II, Klincksieck, 1936, p.142.

- 11) op. cit., p.142~p.143.
- 12) op. cit., p.144.
- 13) Pierre Guiraud: Structures étymologiques du lexique français, 1967. p.5.
- 14) Meillet, op. cit., p.145.
- 15) 拙稿「家を意味するラテン語について」 文学論叢 15輯, 昭和32年12月。286へ
- 16) 同上拙稿 285へ。
- 17) Benveniste: op.cit., p.290~p.291.
- 18) S.Ullmann: Précis de sémantique française, Francke, 1952. p.222
- 19) op. cit., p.223.
- 20) op. cit., p.223.
- 21) O. Bloch et W.von Wartburg: Dictionnaire étymologique de la langue française, PUF, 1968, p.141.
- 22) 拙稿「ブシュケーの意味」澤瀉久敬先生古稀記念文集, 南山大編, 昭和49年10月。
- 23) 『定本柳田国男集, 第二十巻』 272へ~280へ。その他。

Sur la reconstruction interne

Reiichi HORII

La reconstruction par la comparaison est bien connue dans le domaine des langues indo-européennes. Le linguiste y s'efforce de suivre l'enchaînement des monèmes au cours de l'histoire par les procédés comparatifs.

La méthode de reconstruction interne est la seule applicable dans le cas de langues dont la généalogie ne serait pas encore attestée comme le japonais. Sans avoir ou avant d'avoir recours à la comparaison, on devrait parvenir à découvrir le prototype du japonais par la méthode interne,